

## 要約

### ・農村の地域作りにおける自然再生活動の多義性

現在、日本各地で住民による地域作り活動が盛んに行われている。本稿で取り上げるのは、そうした中で農村における地域作りの活動であり、とりわけ「自然再生」といった視点を伴う事例を取り上げる。

### ・多主体が絡まりあう複合的な運動の展開

農村の自然再生活動は、様々な主体が絡まりあう。戸沢村の事例は地域住民、公民館活動と学校が協働してつむぎあげ育て上げてきた地域ぐるみの教育活動が主題となる。宮城県田尻町の事例は、外部の環境保全団体や研究者、活動家の動きが発端となって、農家を中心とする地元の意識を変えつつあり、地域ぐるみでの再生活動へと向かう萌芽を見せる。この沼を舞台に渡り鳥を保護する運動は、活動範囲を周辺の農村地域に広げ、人と渡り鳥が共存する環境保全型の農業と地域作りを目指すまでに発展している。

二つの事例を通して農村の住民を主体とした地域作りの諸相を自然再生活動から浮き彫りにする。

### —農村の地域作りにおける自然再生活動の多義性—

現在、日本各地で住民による地域作り活動が盛んに行われている。本稿で取り上げるのは、そうした中で農村における地域作りの活動であり、とりわけ「自然再生」といった視点を伴う事例を取り上げる。「自然再生」とは、近年環境保全の分野で出てきた概念である。平たく言えば、これまで人間の活動によって壊されてきた自然環境を取り戻すことを示す。しかし、特に人の手によって形成された 2 次的自然環境が大部分を占める日本の場合、このことは環境を形成する基盤となった、人の自然に対する感性、人の営み、人と人とのコミュニケーション（結い、講などに代表されるような）などの再生をも意味するものなのである。

本稿では農村の地域作りを自然再生活動の文脈で読み直し、その展開の諸相と今後の方向性を運動に参画する人々の動きから、2つの事例を通して記述する。このことは、結果的に、現代社会が抱える環境問題とコミュニティのあり方とその課題を解決するための積極的な姿勢とは何かということを示唆することになるだろう。

### —多主体が絡まりあう複合的な運動の展開—

農村の自然再生活動は、様々な主体が絡まりあう。本稿では、現場で実際に取り組む住民を主体として筆を進めることになるが、住民だけで運動が展開するわけではない。行政、NPO・NGO、研究者、企業などが時に相互に絡み合いながら複雑に入り、筆者もそうした外部参入者の絡まりあいの中の一員でもあるのである。これら他種多様な参画者はそれぞれの思惑をもって入っているものであり、かならずしも運動の統一的なスローガンを形成し共有するものではない。しかしながら、一つの運動は時に相互に対立する多主体のそれぞれ

れの動きの中で機能し、展開していくものなのである。これは統合的なアイデアや理論を拒むものであり、本稿もこうしたことから（唯一の、あるいは客観的な）結論を導き出しているわけではない。むしろ住民と地域社会を取り巻く他主体の諸相を、可能な限り浮き彫りにすることを目指したものであるとして読んでいただければ幸いである。

## 2つの自然再生活動の事例について

取り上げる2事例は、次の点で対照的である。

戸沢村の事例は地域住民、公民館活動と学校が協働してつむぎあげ育て上げてきた地域ぐるみの教育活動が主題となる。それは里山、里地、里川での暮らしの知恵や技術を子ども達に継承する活動である。農作業体験やわら細工作り、炭焼き、川遊び、山菜採り……。教えるのは地域のお年寄り、若い世代と双方向のコミュニケーションが復活した。自然の復元だけでなく、文化の継承、農林業の担い手育成、さらに産品買い這うといった多面的な要素が重なる事例である。

宮城県田尻町の事例は、外部の環境保全団体や研究者、活動家の動きが発端となって、農家を中心とする地元の意識を変えつつあり、地域ぐるみでの再生活動へと向かう萌芽を見せる。宮城県田尻町の蕪栗沼。ここは秋になると雁などの渡り鳥が群れとなって降り立つ。この沼を舞台に渡り鳥を保護する運動は、活動範囲を周辺の農村地域に広げ、人と渡り鳥が共存する環境保全型の農業と地域作りを目指すまでに発展している。世界を移動する鳥たちを追う研究者や自然保護団体、農業関係者、行政が連携を取りながら、地域と自然の再生に向けて歩みを続けている。

二つの事例を通して農村の住民を主体とした地域作りの諸相を自然再生活動から浮き彫りにしてみたい。

## おわりに

これら2つの事例から見えてくることは、これらの活動が、農村という一地域圏を越えた普遍的な価値を持ちつつあり、またそのことに地元の住民や運動に参加する活動者自身が気づき発信しようとしている様である。筆者には、本稿の事例を初めとする各地の地域作り活動が、一地域圏のささやかな取り組みであるにもかかわらず、非常に広範囲にネットワークを広げていく大きなムーブメントであるように思われる。それは、これらの活動自体が、おそらく理論や学問的な研究の枠にとどまらず、現代社会の一市民として具体的に実践し行動すること、社会運動に積極的にかかわるべきであることを、相互に分野は違えど運動を通底して強烈に主張しているからなのだろう。それは自己の日常生活としての、仕事としての、人間としての行動のあり方の変革を激しく要求する。研究の基本的姿勢が取りざたされている昨今だが、現代社会のこうした地域の動きを見つめなおすためには、私見では、社会活動としての文脈で研究のあり方を見直さなければならないだろう。